
神機使い達の戦い

レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神機使い達の戦い

【Nコード】

N9170X

【作者名】

レイ

【あらすじ】

pixivに投稿した作品を連載させてみようと思い、始めてみました。

処女作なので、文才には期待しない方が良かった…
あらすじは、物語が纏まってから載せると思います。

「おっ、いたいた」

霞んだ太陽の下、立ち並ぶ廃墟の街で、一匹のトラに似たような生物が血溜まりの中で、生きていたであろう犬のような生物を喰らっていた。血溜まりは、とても鮮やかな紅い色で、まるでパレットの上の赤い絵の具みたいだ。

「あれが、今回のターゲットか」

そうつぶやく少年の腕には、赤と黒でできた腕輪をはめ、その手には、常人では持ち上げることさえ難しそうな、少年には不釣り合いな、白く、そして、黒い刃を付けた大きな鋸を「片手」で持っていた。

身長170cmくらいの彼にはとても大き過ぎる代物だった。

少年：ロイは、ちらとヴァジュラをみると、ヴァジュラに向けて大鋸を持っているとは思えないようなスピードで走り出した。ヴァジュラは食事のため、接近して来るロイには気付かない。

近づいてみると、ヴァジュラの全貌が見えて来る。全身、黒い毛で覆われていて、紅のマントをしていた。大きさは、5mくらいあり、ヒトが抗えるような生物ではない様に思える。食事のため、顔は見えないが、可愛い顔をしてるとは到底思えない。

「くらえっ！」

ロイが、ヴァジュラの後脚を凶悪そうな大鋸で斬りつける。いや、削る、という表現が正しいのかもしれない。斬りつけたことにより、ヴァジュラがこちらをみる。…やはり可愛い顔はしていない様だ。トラのような顔に、二本有る内、一本が折れている牙が特徴的だ。

「ゲオオオオ？」

ヴァジュラがこちらを向いて威嚇する。ロイは、怯みもせず、ヴァジュラの顔に大鋸を振るう。鮮血が、飛び散った。赤い血が、地面に向けて落ちる。

「まだまだあ！」

ロイは、更に追い討ちを掛ける。二回、三回と、前脚や顔を斬りつける。ヴァジュラも負けじと、前脚でロイを切り裂こうと、ロイに向けて振るう。しかし、ロイには、まるで見えているかのようにして、かわす。どうやら、ヴァジュラとは、何回も戦ったことが有るらしい。

何回もヴァジュラを斬りつけるうちに、突然、ヴァジュラの目つきが変わった。

「ガオオオオオ？」

ヴァジュラの周りには雷が^{はし}迸る。怒った様だ。…それもそうだが、食事中にもかかわらず、いきなり自分を斬りつける敵に、怒らない訳が無い。

ロイは、一旦離れると、広場の方へと走り出した。ヴァジュラもその後を追う。「New page」

ロイは、広場の向こうにいた。突然、大鋸が滑らかに滑る様にして、一瞬のうちに、ガトリング砲へと切り替わる。途端に、ヴァジュラに向けて、かん高い発砲音と共に、冷たく、青い弾丸が飛んで行った。

ヴァジュラは、走っていたため、モロにくらった。走るのをやめる。…と、思ったなら、いきなり、ロイにめがけて飛び掛かって行った。ロイは、横に転がり込み、難を逃れる。

ロイは、ポケットに手を入れる。そして、ポケットから何かを取り出した。銀色の手榴弾のような物で、安全ピンを付けている。

ヴァジュラは、こちらを向いて飛び掛かってくる。ロイは今度はヴァジュラのいたところに向かって走り出し、転がり込んだ。当然、当たらない。

ロイは、ガトリング砲から大鋸へと切り替えた。そして、こちらを向こうとしているヴァジュラに向かって、さつき取り出した、手榴弾のような物を安全ピンを抜いて投げた。

ヴァジュラの目の前で、それは破裂した。スタングレネードだ。

「グオオオオ」

ヴァジュラは苦しそうな声をあげる。どうやら、ヴァジュラの感覚は麻痺したみたいだ。ロイはヴァジュラの目の前に来ると、大鋸の剣先をヴァジュラに向けて、力をいれ始めた。

すると、大鋸が引っ込み、代わりに黒い龍の顎アギトのようなモノが出てきた。顎は唸り、まるで獲物を前に歓喜をあげている様子にも思える。

「喰らえっ！」

そう、ロイは言っと、顎は待つてましたと言わんばかりに、ヴァジュラの胴体に向けて、喰らい付き、肉を、骨を、皮を、裂き、砕き、引き剥がす様に、貪った。

ヴァジュラは、痛烈な痛み^{こたま}に悲鳴をあげている。悲痛な鳴き声が、周囲に木霊する。

喰らい終わると、顎は引っ込み、大鋸が出てきた。武器：神機じんきと呼ばれるその可変式の剣は何も変わらないが、ロイ本人は光を帯びている。

「行くぜ、相棒」

そう、神機に向けてつばやくと、前とは比べ物にならない位の速さで、ヴァジュラに向けて大鋸を振るう。風を切る音と共に、肉を削り取る音が聞こえる。ヴァジュラは、感覚が戻った様で、雷撃を放ち、放電をする。

ロイは、それ等の攻撃を目にも止まらぬ速さで、すべてかわす。

ロイは、大鋸を担ぎ込み、力をいれ始めた。

「これで」

そして、その凶悪な黒いオーラを纏う巨剣を

「終わりだぁ！」

振り下ろした。

夕焼けも霞んでいる。しかし、その光は綺麗なオレンジをしていて。それに照らされて、一人の少年…ゴッドイーターが、血まみれ

の、荒ぶる神を見下ろしていた…

VOI・2 (前書き)

オリキャラが入ります

「報酬は、まずまずかな」

そう、誰にも当てられていない言葉を発した、布で出来た小袋を持った少年、ロイはつぶやいた。小袋の中で、金属の擦れ合う音がする。

「何に使おうかな」

ロイはそう言つと、自室のドアを開けた。しかし…

「お疲れ」

閉めてしまった。確認すると…やはり、自分の部屋だ。

「幻聴と幻覚がするみたいだ…一応、博士にみせておこうかな」

そして、再びドアを開けたが、その幻聴と幻覚が消えることはなかった。

「なんで一回ドアを開けて、また閉めたのさ。頭おかしいんじゃないノ？」

「お前こそ頭おかしいんじゃないのか？常識的に」

「なんデ？」

「普通、人の部屋には勝手に入らない」

そう言つて、周りを見渡して何も盗られていないことを確認すると、頭を掻きながらベッドに座りこんだ。綺麗な黒い髪が、ぐしゃぐしゃになる。周りには本が沢山落ちている。

「良いじゃん、ぼく達の仲間じゃないか」

部屋にいた、長身で金髪の青年が言う。

「親しい仲間にも礼儀あり、って知ってる？まあ、そんなに親しい仲間では無いけどな」

「この国の言葉？素晴らしいネ！」

「意味分かってないだろ！」

「エッ、分かっているに決まってるじゃないか。共通語だよ」

「じゃあ、今直ぐに出ていけ」

「それと、これとは別だよ」

どうやら、こいつは出て行くつもりはないらしい。

「早くお客様に飲み物でも出したらどうなんですか？」

「こいつ…」

勝手に入ってきたくせに、偉そうに飲み物まで要求してきやがった。

こいつ…アレンは、ロイと同じ神機使いの青年だ。

神機とは、ゴッドイーターと言われる職業の人が持つ、ニンゲンの天敵：アラガミを倒すための武器だ。アラガミは、通常の武器だと、何をやっても死なない。刃物をぶっさそうが、マグマに沈めようが、恐らく核ミサイルをぶっつけようが、死なない。

種明かしをすれば、アラガミと呼ばれる一個体一個体は、【オラクル細胞】と呼ばれる細胞の塊だ。

オラクル細胞は、【考えて喰らう】単細胞生物で、繋がりがとても強いため、普通の武器ではキズをつけるのは困難な作業で、つけたとしてもすぐに回復してしまう。ではどうするか、そこで、【神機】の登場である。神機は、同じくオラクル細胞を持った兵器である。その強い繋がりを断ち切るには、「喰いちぎる」しか、今のところ方法が無いんだ。しかし、人間は神機から喰べられることは無いのか？と言われると、無いとは言えない。

神機にはオラクル細胞が入っている。普通の、何も付けていない人が触ると、捕食されて重傷を負う。しかし、神機にも好き嫌いがある。ちなみにロイはフルーツ味のレーションが嫌いだ。

まあ、神機使いには、神機の嫌いなもの【偏食因子】と言われるものが入ってるらしい。…毎回投与されているけどね。

とりあえず、神機はアラガミを倒すための手段、と考えてもいい。

それを扱うのがロイ達神機使いだ。

「早く飲み物ハ」

「お前、客じゃあ無いだろ」

「それは良いから飲み物ヲ」

「持参してこい」

「それは嫌でス〜」

「じゃあ、我慢しろ」

「そんな〜」

ロイは立ち上がると、冷蔵庫にコーラを取りに行った。冷蔵庫の中から赤い缶を取り、プルタブを使い、開けて飲む。薬品の匂いが口いっぱい広がる。ロイは、この味が好きだ。

「それでいいヤ〜」

「絶対にやらん」

ロイはそう断言したが、手にはもう一つ缶を持っていた。

「下さいって言えたら、あげても良いけどね。礼儀を知れ、礼儀を」

「下さい〜」

「ほれつと」

ロイはそう言い、アレンに向かって缶を投げた。

「ありがとウ〜」

「お前の口から、その言葉が出るとは思わなかった」

「ロイ〜、失礼だゾ〜。この前お前が言ってたじゃんカ〜」

「ああ、悪い」

アレンは、コーラを飲み始めた。

アレンは、特殊な環境で育てられていたため、礼儀がなっていない。そのため、同期のロイが、色々と教えてあげている。

同期と言っても、まだ神機使いになって二週間程度しか経っていないが…

その期間内に、ヴァジュラを単独で倒すことが出来るのは大変素晴らしいことで、普通は一ヶ月から二ヶ月は掛かる。

ヴァジュラを倒すことが、一人前の証とも言われている。

ちなみにアレンは、仲間と連携することで、初めて真価を発揮するため、単独で倒すことは難しいが、実力はロイと同じ位だ。

「早速だけどサ〜」

そう切り出したのはアレン。

「何かサクツと倒しに行こうぜ」

「えっ、今行ってきたばかりだけど」

「良いかラ、良いかラ」

そう言くとアレンは立ち上がる。

「どうせなら、アリサとかコウタを誘おう」

「良いネ、それは良い」

これで早く終わるな。そう思いながら、重い腰を上げてエントランスへと向かった。

vol.2 (後書き)

はじめまして、レイです。

突然ですが、何か意見をくれたら良いなあーと思います。

何でも良いので、送って下さい。

それでは

VOI・3 (前書き)

今回ののは、ボルグ・カムランです。

「相変わらず、寒いな、こじ」
そうつぶやくのは、黒髪の少年…ロイ。

コートを羽織っている。耳当ても。手袋も。マフラーも。カイロまで完備している。

お分かりだろうが、ロイは寒がりだ。

「全く、ロイは寒がり何ですね」

的を得た発言をする、少女…アリサは、銀色にたなびく髪を帽子で止めている。ちなみに服装は…

「寒そうだね」

アレンは言う。そう、アリサの服装はとても露出度が高く、最初は目のやり場に困る程。

「そうでもないですよ」

ソツ無く返すアリサ。

「雪国育ちですから」

イヤ、そう言う問題じゃあ無いから…と心の中で言う三人。

「そう言えば今回の相手は何だったけ」

話の話題を変える様にコウタが言った。

覚えとけ…と心の中で言う二人、あれ？一人足りない。

「そう言うのも覚えていないんですか？今回の相手はボルグ・カムランですよ」

口に出すなよ、面白かったのに…と心の中で言うロイ。

「余り喋らないネ」

「そうですね。雪でもふるんじゃないでしょうか？」

「イヤ、もうふってるから」

はははー、と笑う三人…あれ、一人足りない。

「寒いから余り喋りたく無いんだよ」

消えそうな声で言うロイ。

「さっさと終わらせてしまおうぜ」

アレンはボルグ・カムランを探しに行ってしまった。

「しょうがないですね、コウタ！ロイ！行きますよ」

「……」

「おい、どうした、早く行くぞ」

「先に行っておいてくれ」

「どうした」

「暑いからコート脱ぐ」

「寒いんじゃないのかよ！」

こうしてボルグ・カムランを探しに寒い寒い廃墟となった寺院をうろろろしてるのでした。

「おオ、いたいタ」

アレンはボルグ・カムランを見つけると、信号弾を打ち上げた。ここに集まってもらうためだ。

「一番早く来たのはアリサだ。」

「ほんとにいますね」

「ぼくを疑ってたノ？酷イ」

そんなこと無いですよ、とアリサは言った。

強く吹き付ける風は、悲鳴をあげる人の声にも聞こえる。

次に来たのはコウタとロイだ。二人は一緒に探していたらしい。

「もう寒く無いんですか？」

アリサは、ロイに聞いてみると、

「大丈夫、もう寒く無いんだ」

「もう慣れたんだ、早いネ」

「動くと暖まるだろ、だからだよ」

「そろそろ行こうぜ。早く終わらせてしまおう」

「ええ、そろそろ始めましょうか」

そして、四人はボルグ・カムランを追う。

ボルグ・カムランは、座りこんだ？様な形で無機物を喰べていた。アラガミは、何でも喰べる。ビルだろうが人だろうが、何でも喰べる。

さらに厄介なのは、喰べていた物の性質を取り込んだ時だ。

例えば、ミサイルを取り込んだ時、そのアラガミはミサイルを発射することが可能になるかもしれない。

金属みたいになるかもしれない。

今のところ、見つかっていないがジェット機を取り込んだ時、空を自由に飛び回れることが可能になるかもしれない。

アラガミは、日々進化しているのだ。

「硬そうだね」

ボルグ・カムランは、鎧の様な金属質の外殻で覆われていて、とても硬く、生半可な攻撃は弾かれる。

おまけに弱点の口は、顔の様な盾で守られているため、銃撃でのダメージか、貫通属性の刀身で突き崩す位でしか攻撃は難しい。

攻撃方法は、主にしなやかな尻尾と、その先端に付いている針だ。

針は2m〜3m位あり、突き刺さればこの世にオサラバしないといけなくなる。

地面に針を突き刺して、衝撃波を与える攻撃や、頭に付いている小さな針をミサイルみたいに飛ばす攻撃。

厄介な攻撃は、自身を回転させて尻尾で薙ぎ払う攻撃だ。

装甲：つまり、神機の盾で守るか、ジャンプで回避する以外に方法は無いに等しい。

こっちの攻撃方法は、脚を狙い、ダウンさせること。

ダウンさせると、敵は無防備になるため、攻撃のチャンスだ。

直接、口を狙撃するのも効果的だ。

「弱音を吐くな」

そう倒せない敵では無いのだから。

「作戦を説明する。まずは俺が突っ込む、ボルグ・カムランがこちらに気が付いたら、お前ら三人で撃ち崩せ。相手の動きを良く見て回避するように。以上」

そう言うと、ロイはボルグ・カムランに向かって走り出した。

VOI・3 (後書き)

戦いは、次にも…
では

Vol. 4 (前書き)

ボルグ・カムランは、終了です。

「オラアア！」

ロイは、無防備になっているボルグ・カムランの尻尾を斬りつけた。ボルグ・カムランがこちらを振り向く前に、ロイは三回程尻尾を攻撃した。

「ガアアアア！」

こつちを向いてボルグ・カムランが威嚇する。

「今だ！やれ！」

ロイが合図すると同時に、光弾の雨がボルグ・カムランの口に降り注ぐ。

思わず怯んでしまうボルグ・カムラン、注意は完全にロイから外れ、アレン達の方に向かってしまう。

ロイは背後を取り、また尻尾を斬りつける。

ボルグ・カムランは、たまらず盾を構えるが、尻尾は守りきれないため、その間も、ロイは尻尾を斬りつけている。

ボルグ・カムランは、とりあえず銃撃での攻撃を続けている、三人に向かって突進する。

三人は、それぞれ違う方向へと回避すると、また銃でボルグ・カムランを狙う。

「これなら、余裕ですね」

アリサはそう言うと、銃から真っ赤な刀身に変えて、ボルグ・カムランの方にいってしまっただ。

「おい！引き換えせ！」

コウタがアリサを呼ぶが、アリサはそのままいってしまっただ。

「あゝア、行っちゃったネ。どうすル、コウタ」

「あのまま放っておこう。どうせ、ロイもいるし」

「そっだネ。放っておこうカ、めんどくさいシ」

アリサは、ボルグ・カムランの正面に立つと、前脚を切る。金属のはじく音がするが、切り続ける。

ボルグ・カムランは、盾を構えると体をねじる様な構えをとった。アリサは、それに気付かない。

「アリサあ！盾を構えろ！」

「えっ」

次の瞬間、アリサは宙に舞っていた。

理由は簡単、

強靱な尻尾で叩きつけられたからだ。

「ありやりやりや〜、まア、助けてあげますカ〜」

コウタ、よろしくネ〜。とアレンは言うのと、アリサを助けに行った。

「えっ、ちよつと待って、え、おれ、一人？」

絶叫してるコウタを放置して、アレンはアリサのところへと向かった。

アリサの状態は、打撲と肋骨を骨折程度で済んだ。

直撃した割りには、軽傷だった。

この程度なら、大丈夫かな。

アレンは、アリサの肩を叩き、

「起きなヨ〜、アリサ〜」

声をかける。すると、

「油断してしまいました…」

アリサが立ち上がる。今まで立ち上がることが出来なかったのにもかかわらず。

これは、リンクエイドという行為で、倒れて力尽きた神機使いを助けることが出来る。アレンは、衛生兵と言われている、いわゆる戦う医者みたいな職業だ。普通は、前線には立たず援護等をしているが…

ゴッドイーターは違うようだ。

前線に立って、仲間諸共吹き飛ばすひともいる。衛生兵なのに…
とにかく、衛生兵は治療も御手の物なので、仕事が早い。

衛生兵に救われたひとも少なくない。

「じゃア、ぼくも混じろうかな」

アレンは、狙砲から、短剣みたいな刀身に変えた。

パツと見てレイピアっばい。

「アリサ、援護よろしくウ」

ボルグ・カムランに特攻しているかのように

走り出す

そして、

ボルグ・カムランの

口を貫いた。

「ガアアアア？」

ボルグ・カムランの叫び声が、静かな雪景色に消える。

それと同時に、ロイはボルグ・カムランの

尻尾を斬り落とした。

「ギヤアアアアア？」

ボルグ・カムランは、悶え苦しんでいる。

周りの雪が赤黒い色に染まっている。

「ウソだろ…」

コウタは、啞然としている。しかし撃つのはやめない。

「今だ！コウタ以外は剣で攻撃しろ！」

ロイは、そう皆に指示すると、刀身から黒い顎^{アキト}を出す。

「隙だらけだぞ」

そして、喰らった。

鮮血が飛び散り、点々と、白い雪に色をつける。

二人もロイ同様に、

「喰べちやエ〜」

「喰らえっ!」

ボルグ・カムランを喰らうと、すぐさま銃身へと変えてロイに銃口を向ける。

「渡すネ〜」

「外さないで下さいね」

そう言うと、銃口から光る弾が出て来てロイに当たる。

「ありがとう、二人共」

ロイに着弾すると、ロイの身体が光り輝く。

ロイは、銃身へと流れるように、変形させる。

そして、銃口をボルグ・カムランに向ける。

ボルグ・カムランは、動けない、チャンスだ。

「くたばれ、化け物」

ロイは、引き金を引いた

次の瞬間、巨大な、5m位は有る針が、

ボルグ・カムランへと突き刺さった。

反動で、ロイは少し後ろに下がったが、ボルグ・カムランは、そのまま後ろに吹っ飛んで、動かなくなった。

「ふう、終わった」

ロイは、そうつぶやく。突き刺さっていた針は、消えてしまったようだ。

今の巨大な針は、濃縮アラガミバレットといい、アラガミバレットとは、アラガミを黒い顎：【捕食形態】（プレデターモード）で、生きたアラガミを捕食すると貰える便利な物で、基本的にアラガミの力を奪い取り、使うということをしているだけなので、余りダメージを与える事は出来ない。

しかし、相手に受け渡す事で、濃縮されて威力が増す。

最高レベル3まであり、それ以上は制限されている。

「よし、素材取るぞ」

そう言うと、ロイは、プレデターモードにして

ボルグ・カムランの死体に喰らい付き、もぎ取る。

もぎ取った物は、コアといい、これを持って帰る事が
ゴッドイーターの仕事なのである。

「うーん、微妙」

余りいいものは、取れなかったようだ。

「さあ、帰ろう。用も済んだしね」

ロイは、帰ろうとするが、

「おいロイ！コートはどうした？」

コウタが呼び止める。「あっ、…どっかに置いて来た…」

「何やってんだ（ですか）！」

こうして、寒い中でロイのコート探しは、始まった…

vol.4 (後書き)

続き…

アリサ「あっ、見つかりました！」

ロイ「えっ！どこ」

アリサ「ほら、あそこ！」

アレン「雪だらけだね」

コウタ「ドンマイ、ロイ」

ロイ「うわあ、ビショビショ」

ロイ「あと、コウタに励まされてしまったのが悔しい」

コウタ「おい！それどういう意味だよ！」

ロイ「そのままの意味だよ」

VOI・5 (前書き)

ロイの私生活、発覚。

「あーあ、疲れた」

ロイは、帰ってきたの第一声を発した。その手には、布地の報酬袋が握られている。中に入っているコインは、少なくともは多くもない。何を買おうか、とつぶやく。

「今日はもうミッション、行かなくていいや」

そう言つて、自室のベッドに身を投げる。ふかふかしてて気持ち良い。ロイの部屋は、比較的には片付いている方だ。金属製の床には、ゴミ一つ落ちていない。だが、同じく金属製の棚にはコーラの缶や、単行本等が散乱している。ベッドの上にも本が散らばってる。

「コーラでも飲みながら、本でも読もうかな」

ベッドから立ち上がる。そして、入り口付近にある冷蔵庫に手を伸ばす。中にはコーラの缶やレーション、液体火薬…など、バリエーションに富んだものとなっている。液体火薬は、何時も持ち歩いていて、

ポーチに入っている。

コーラを取り出すと、ロイは早速缶を開けた。シュワシュワと泡立つ音がするそれを、一口飲む。口の中ではじけて爽快感が増す。やはり、ミッション後はこれに限る。

「そつえば、まだ途中で読み終わっていない本があったよな？今日はそれを読もう」

ロイは、缶を棚に置くとベッドに飛び込む。シーツがぐしゃぐしゃになるが、気にしない。棚にあるコーラと本を取り、ページを開く。

ロイは、読書が趣味だ。明るい話よりも、暗く、悲観的な方が好きな方だ。このご時世に、変わっているとロイは思っている。

「ジーナから借りてきていたっけ、この本」

ジーナとは、色々と気が合う。本の趣味でも、気が合う。ロイは、コーラを手にするが滑ってしまい、零してしまった。当然、シーツはコーラ色に染まってしまふ。借りた本は、無事に終わった。

「…、今日は乾かすものが多いな」

ロイは、シーツを水で良く洗うと洗濯機に入れる。数分後、綺麗なシーツが洗濯機の中にあった。ロイは、手際良く取り込む。床のタイルが水浸しだ。乾燥機にいれようとするが、先客がいた事を思い出す。そう、コートだ。コートを取り出すと、シーツを乾燥機にぶち込む。スイッチを入れた。ロイは、コートをハンガーに掛けようと、歩き出す。転んだ。タイルは、水浸しだった。

ロイは、新しいシーツを敷いたベッドにスライディングする。シワ一つ無いシーツが、見事にぐしゃぐしゃに。そして、本を読み始めた。

ロイの頭には、ガーゼが付いている。黒い髪は度重なる苦惱とイライラで、ボッサボサとなっていた。掻きむしったのであろう。

ロイの癖だ。ストレスが溜まれば溜まる程、ボツサボサ度(?)は上がる。見ている方は便利だ。 一時間経つと、ロイは本を読むのをやめる。自分のルールで決まっているからだ。

「何か、買いに行こうかな。コーヒーも切れていたし…」

ロイは、ベッドから出るとドアに向かった。ドアは、センサーが付いているため、ロイを感知すると開いてくれた。ポーチには、今日の報酬が入った財布がある。 目的はコーヒーなので多くは持ち歩いていないが、3000fcくらい入っている。 fcとは、フェンリル クレジット、今使われているお金の単位で、世界を牛耳っている【フェンリル】と言う元、製薬会社が発行している。 フェンリルは、アラガミを独自に研究してオラクル細胞を見つけ、特許を取り、世界中に支部を置いている。 ゴッドイーターや、ゴッドイーターの神機を研究したり、作ってみたりしている。アラガミの研究もしている。 まあ、要するにお金ってことだ。

ロイは、早速万屋へと足を運んだ。 エレベーターに向かう途中で、アレンを見つけたから、挨拶すると、無視しやがったから蹴りを入れた。 壁がへこむ。

「挨拶ぐらいしやがれ！」

アレンは、すぐさま謝った。ごめんね、と言う。理由は、単純、且つ明確だった。 髪の状態を見たからだ。 本当に便利な癖だ。いくら礼義正しく無くても、謝る。怒らせると怖いから。

アレンは、へこんだ壁に手を当てて歩き出す。目的地は、変更された。 医務室だ。

「買ったコーヒーは、ダンボールに入れといて下さい」

万屋のおじさんにそう言うロイの髪は、だいぶ収まっていた。ストレスは、発散させたらしい。万屋のおじさんから、コーヒー入りのダンボールを受け取ると、財布から1000fc出して渡す。お釣は良いです。と、ロイは言う。そして、部屋に戻る。

「さあ、そろそろ寝るかな」

そう言ってベッドに横になると、明かりを消して掛け布団を被る。枕を置いて顔を埋める。至福のときだ。少し経つと、仰向けになる。

「おやすみ」

つばやくよつに言つと、ロイは、夢の世界へと飛び立っていく…

VOI・5 (後書き)

アレン「いてて、やっぱりロイを怒らせると怖いネ」
胸と腹部に包帯を巻いたアレンが、医務室のベッドの上で嘆いてい
た。

VOI・6(前書き)

伏線があります。

ここは、夢の中ですよ。

ここに一人の小さい幼いロイと、たくさんの子供達がいまいます。皆、同じ年頃ですよ。見た目は、10代前半の子供達ですよ。遊んでいます。ロイも、その中に混じって遊んでいます。楽しそうです。ここは、孤児院ですよ。孤児院だったところですよ。悪夢が舞い降りるまでは。

ロイは、一人の女の子と特に仲が良かったですよ。周りは冷やかしますが、気にしません。手を繋いで歩いたり、一緒に寝ちゃったり、二人共仲が良かったですよ。両思いでした。

女の子は、本を読むのが好きでした。ハッピーエンドで終わるお話が好きで女の子でした。ロイも本が好きになりました。最後に、幸福で終わるお話が好きになりました。そして、女の子を好きになりました。伝えられず、終わりました。

悪夢が、来たから、ですよ。

二人共本を読んでいる途中で、外から悲鳴が聞こえました。窓から様子を見ると、子供が数人死んでいました。血がいつぱいでました。悪夢は、黒い？を口から放出して、全てを焼き払いました。いつぱい燃えました。孤児院も燃えました。急いでロイ達は、窓からでました。次の瞬間、孤児院は爆発して、消えてしまいました。黒い？だけが残っています。二人共服を汚していました。女の子の金髪も、ロイの銀色の髪も、煤すすで汚れていました。悪夢は、こっちを向きます。そして、

大きな爪で

女の子を切り裂いてしまいました。

ロイは、悲しみました。彼は、泣きました。でも、悪夢は迫ってきていました。ロイは、悪夢に向かって走り出しました。

そのあとロイはどうなったのか知りません。ただ、身体はとも強いものになっていて、悪夢は姿を消しました。女の子はいなくなっ
てしまいました。そこには、孤児院は在らず、焼け野原が広がって
いて、ロイがいました。黒い髪の毛、ロイがいました。

そして、

この世界に、元の大人しいロイを知る者は、一人以外消えてしまっ
たのです。

「うわあああああ！」

ロイは目を覚ました。油汗で、身体中べとべとだ。ロイはとりあえ
ず呼吸を整える。あとでシャワーを浴びよう。そう思ったロイは
ひとまず洗面所へと向かった。

「久しぶりに、夢を見たと思ったら、これが…」

ロイはシャワーを浴びながらつぶやいた。黒い髪から水滴が滴る。
朝から気分は最悪だ。一番思い出さたくないものを、夢で見しま
ったからだ。バスから出ると、タオルで身体中を拭いた。髪もぼ
さぼさになるが、決して不機嫌では無い。着替えると、一人の人が

訪ねて来た。 リンドウさんだ。

リンドウさんは、ロイヤアリサ、コウタのいる第一部隊の隊長だ。他にも、防衛班と呼ばれている第二部隊やアレンのいる第三部隊などがある。 隊長と呼ばれている人は、普通に考えると分かるが、一人だ。その隊長の中でも特に支持されていて、親しまれている。偉そうな素振りを見せないし、人柄も良いからだ。

「何か用ですか？リンドウさん」

ロイは、問いかける。

「早く準備を済ませてくれ。話は、それからだ。 エントランスで待っている」

そうリンドウさんは真面目に言うと、スタスタと去って行った。ロイは急いで準備を済ませ、エントランスへと向かう。急いでいると人間は早足になるらしい。

リンドウさん達は、集まっていた。でも、新人のアリサや、コウタがいない。ソーマとサクヤさんだけが集まっていた。

ソーマは問題児で、命令違反や、単独行動などを起こしている。頻繁に…でも、ロイとは結構気が合うらしく、たまに一緒に飯を食いに行ったりする。

サクヤさんは、リンドウさんの幼馴染で密かでは無いが想いを寄せている。叶えば良いな、とロイは思っている。

ソーマや、コウタ、サクヤさんの使う神機は、旧型と言う神機で、刀身と銃身の切り替えが出来ない。ソーマは、漆黒の鋸ソウで、サクヤさんは白い狙撃銃だ。二人共ベテランで、ソーマは6年、サクヤさんは、ゴッドイーターになって3〜4年になる。ソーマは1

8歳だが、若冠12歳でゴッドイーターになった。すごいと素直に思う。

「よし、じゃあ話すぞ。今回討伐する敵は、ウロヴオロスだ!」

「はあ?」 「ええっ?」 「マジかよ...」

左からソーマ、サクヤさん、ロイの順番。
さて、どうなる...

VOI・6 (後書き)

伏線はあとで必ず拾います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9170x/>

神機使い達の戦い

2011年10月28日03時19分発行